

研究科・専攻名

家政学研究科
食物栄養学専攻**教育課程・学習成果の検証**

1. 研究科・専攻の教育課程について、院生の履修状況に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、院生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

コロナ禍において、少人数ではあるが対面授業が困難な期間もあった。そのような中で、オンラインでの講義なども駆使して、教育活動が行われた。開講科目数は適切であり、非常勤比率は数%程度と低い比率であり、主に常勤講師により授業が行われ、それを補足あるいは発展させる形で非常勤講師による特別講義が行われている。大学院生が食物栄養学に関する体系的で専門的な知識が得られるよう、体系的な科目編成となっている。

【成果および向上施策】

大学院特別講義を提供することで、幅広い分野の最新の知見も紹介できた。

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし

2. 「大学院生アンケート」（<http://web.kyoto-wu.ac.jp/gakuseki/cat82/20210324132744.html>）等の資料を参考に、研究科・専攻の教育について、効果が挙げられている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

家政学研究科全体としては57.9%の回答率で、各専攻の集計がされていないため他専攻の結果も含むが、教員の指導について高い評価がされており、各大学院生の研究内容にそった授業や指導が行われていると考えられる。

【成果および向上施策】

授業内容についてのアンケート結果では、期待していた通りとの回答が前年より増加しており、コロナ禍にも関わらず、授業の改善の成果がでたものと思われる。

【課題および改善施策】 ※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

とくに2020年度前期は対面授業が行われなかったことから、大学院生はTAを経験できなかったことがあるが、コロナ禍の落ち着きとともに大学院生に指導経験を積ませることが再開できるようになることが期待される。

3. 研究科・専攻として行っている、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）はどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

FD活動として、外部講師を呼んで講演会を行い、教育に資する勉強を行った。新型コロナウイルス流行に伴い、学生が不安に感じたり、オンライン授業が続くなど環境の変化が学生の心の健康に影響する可能性もあるため、学生のメンタルヘルスに関する講演を聴き、質疑応答を行った。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし。

4. 教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

職務経験に基づき、修士課程および博士課程の指導教員、指導補助教員等を研究科会議において議論、審査している。年齢構成は、40代から60代まで分布し、職位も教授、准教授、講師から構成されており、男女比もほぼ1:1であることから、バランスに配慮した編成となっている。また、食品学、栄養学、食品衛生学、調理学の4分野に教員が配置され、カリキュラムに基づく教員組織となっている。

【成果および向上施策】

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】

特筆すべき事項なし。